「キリストにある自由」

ガラテヤの信徒への手紙２章１－１０節

森島　牧人　牧師

今日のパウロの手紙には、大事な用件でエルサレムに戻ったことが書かれています。アンテイオキア教会の代表者であるバルナバと青年テトスを伴ったこのエルサレム訪問は、パウロの異邦人伝道がエルサレム教会の主だった弟子たち、ペトロ・ヨハネ・ヤコブらに受け入れられるかどうかを見極めるためのものでした。＜エルサレム使徒会議＞と呼ばれる初代教会初めてのこの公式会議は、キリスト教の歴史の中でも重要な会議として位置づけられています。会議の模様は使徒１５章に詳しく記されていますが、これが開かれたのは紀元４８，９年ことで、復活の主イエスが昇天されて１８，９年後にこの会議がもたれたということになります。このことは当時すでにエルサレムから遠く離れた地にも教会があり、イエス・キリストを見たこともない人々がその福音の中に生きていたということを示していて、キリスト教が相当なスピードで広がったことを明らかにしています。

さて、初代教会最初となるこの会議の議題、それは割礼を受けたユダヤ人に福音を伝えるペトロと、割礼を受けていない人々に割礼を施すことなく福音を伝えるパウロの二人が、同じ神の働きによって共に使徒として立てられているのかどうかということでした。律法を守ることも割礼を受けることもなく、＜イエス・キリストのみ＞を福音とするパウロの伝道は、ユダヤ主義のキリスト者にとっては衝撃的で、受け入れ難いものだったのです。

しかし、このエルサレム使徒会議は、＜律法も割礼もなくただキリストの出来事という唯一の福音によって救われる＞というパウロの伝道を、良しとしたのです。神がパウロを、またエルサレム教会の主だった面々を用いて、この会議を支えられたということでしょう。これによって異邦人も＜主イエスによって救われる＞ということが認められたのでした。このことはその後の伝道・宣教、つまり教会そのものの運命を決定づけるものとなりました。これがなければ、キリスト教の存在はユダヤ教の一分派としてのものだったことでしょう。このようにキリスト教会は、主イエスによる福音＜のみ＞を信じ、何の資格も条件も要求されないままそれを受け入れてその中に生きて行くというところから＜出発＞したのでした。

ただすべての人がこれを良しとした訳ではなく、ユダヤ主義者の中にはこれを妨げようとする動きがありました。パウロはそれを承知の上で、テトスを同行させていました。ギリシャ人で割礼を受けず、ただキリストの福音のみを信ずる青年テトスのあまりの素晴らしさに、パウロの説く福音の確かさを見たエルサレム教会の人々は、これを認めざるを得ませんでした。同２：３には「わたしと同行したテトスでさえ、ギリシャ人であったのに、割礼を受けることを強制されませんでした。」とあります。これでエルサレム会議の方向は決定し、律法･割礼なしで＜キリストのみを福音とする＞パウロの伝道を受け入れたのでした。

また今日の手紙の中でパウロは、福音を＜自由＞という言葉で表現し、同２：４に「わたしたちがキリスト・イエスによって得ている自由・・・。福音の真理が、あなたがたのもとにいつもとどまっているように・・・。」と書いています。そして律法や割礼を求めるユダヤ主義者たちを、「彼らは、わたしたちを奴隷にしようとして」（同２：４）と激しく非難しています。律法や割礼に縛られ、それを守ることの出来ない不安を抱えた生活の中に自由はありません。それとは逆にキリスト・イエスに於いて得られる自由は人間の努力や成果を意味する律法や割礼からの自由です。キリストに結ばれ、キリストのものとされている者はいかなる権威・権力の支配からも解き放たれて、キリストの恵みの支配のもとに置かれているのです。そこにあるのは＜主イエスと共に生きる中にある自由＞であり、それこそが真の自由なのです。

エルサレム使徒会議は、その最後に一人一人が＜握手＞をして会を閉じたと書かれています。この握手は信仰の交わりと伝道の使命に向かって＜一致したこと＞を示す握手であると同時に、割礼を受けた人々に対する任務負っているペトロと異邦人に対する任務を負っているパウロとは、もちろん違いがあるのですが、違いがあるからこそ出来る＜協力＞を確認する＜握手＞でもあったのでした。

最後にもう一つ、「貧しい人たちのことを忘れないように」（同２：１０）ということでも一致したとパウロは言っています。伝道の先々で献げられた献金を、パウロはエルサレム教会の貧しい人々のために送り続けたのでした。伝道のために一致協力する中で、助けを必要とする兄弟姉妹に手を差し伸べる、これも伝道の一致の在り方であるとこの手紙は教えているのです。

（説教要約　羽入田悦子）